カトリック山手教会月報

やまて

編集・発行　カトリック山手教会 広報委員会　〒231-8652 横浜市中区山手町44番地
☎（045）641－0735　http://catholicyamate.org/
第645号　2023年11月12日

鈴木真主任司祭　主日ミサ説教

2023年８月６日　主の変容　A年
マタイ福音書　17章１-９節

「イエスの姿が変わる」…まぁ不思議な箇所ではあります。

福音書の位置付けとしては、最初の受難予告に動揺する弟子たちに、イエスは、しばし復活の栄光を垣間見せて励ました…というのですけど、それはどう考えても無理がありますよね。まずペトロさんは、わけのわからないことばかり言っていますし…そして、もし本当に受難の前に弟子たちがそのようなすごい体験をしていたなら、イエスが捕まった時、なぜいとも簡単に、それも一人残らずイエスを裏切ったのか、という疑問が生じるわけです。しかもペトロにあっては、３回も「俺はイエスなんか知らねぇ！」と言い放ったのですから。

多くの聖書学者が指摘するところでは、ここはもともと「復活顕現物語」、つまり復活したイエスと弟子たちが出会う、という内容の記事だったのではないか、と言うのですね。「光のように白くなった⑵」という表現は、実際、復活の記事の中によく見られるものだそうですし、第２朗読の『ペトロの手紙』でもこの体験が述べられていますが、それが言わば「復活体験」であったとするなら、何となくわかります。

ただ一つ引っかかるのは、やはり、ここで強調される「弟子たちの無理解」ということです。「非常に恐れた⑹」とは、自分たちが目にしていることを理解してない、という表現だそうです。

気付くポイントがあるとするなら、「復活の体験」でさえ、それに触れた時にすべてがわかるわけではない、ということかもしれません。ルカ福音書とその続編である使徒言行録では、「聖霊降臨」を派手に描いているのも、そのしるしかも知れませんし、他の福音書でも、そういう傾向はみられます。衝撃的な出来事に触れた時、それがどういう意味か、それを通して神さまが何をなさったのか…後からじわじわとわかってくることもあります。弟子たちにとっての「復活体験」とは、それを含めての長いスパンの中でのことだったでしょうし、わたしたちにとっての「復活体験」も、同じようなものなのかもしれません。人生の中で一つひとつ起きていくことが、ああ、これはこういうことだったのか、神さまはあの時これをなさっていたのか…と長い時間の中で気づかされることが確かにありますし、それもまた、自分にとっての「復活体験」と言ってもいいのでしょう。

何かと語り草にしていることですが、わたしは上智大学の神学部で学んでみたい…というまことに

不純な動機で神学校に入ったため、司祭召命に関しては、ずっと自信がありませんでした。でも、あるとき気付いたのです。それこそが、神さまが自分を呼ばれたことのしるしだった…と。「自分が選んだ」と思っていたことの中に「神さまが」なさったわざがはたらいていた…それに気付いたのが、わたしにとっての「復活体験」でした。そして、人間生きていく中で、そのような「復活体験」をずっとし続けていくものなのかもしれません。

　あらゆることを通して、キリストの「復活」を体験させてくださる神さまのわざに、共に気付いていきたい、と思います。